

2020年 2月 12日

大牟田市長 関 好 孝 殿

一般社団法人 日本建築学会九州支部

支部長 尾 崎 明 仁



大牟田市庁舎本館の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、貴市市庁舎本館は国の登録有形文化財に登録されておりますが、熊本県地震による耐震上の問題、老朽化、今後の災害対策の拠点やまちづくりの拠点づくり、市民のサービス向上、職員の業務促進等を鑑み、「大牟田市庁舎整備に関する基本方針(案)」が前市長時に作成され、当市庁舎本館を建替えることで、検討がおこなわれてきました。当市庁舎本館の建替えに関することはマスメディア等を通じて報じられており、福岡県内に留まらず、広く注目をされています。また、市民による「登録有形文化財大牟田市庁舎本館の保存と活用をめざす会」が、「市庁舎整備問題に関する提言」が前市長に提出されていることも報じられています。

ご承知のとおり、当市庁舎本館は、1933（昭和 8）年に前身の庁舎が焼失したため、計 51 回の審議を行い、他の自治体における当時の代表的な庁舎を研究した結果、1936（昭和 11）年に竣工した建築です。竣工式の写真をみますと、市民の喜びが伝わってきます。また、重厚で威厳がある大規模な建築は、当時の大牟田のまちの力や勢いを感じさせてくれます。第二次世界大戦下の空襲にも耐え、大牟田駅の正面に位置し、大牟田を象徴する建築とすることができます。

当市庁舎本館は地方庁舎建築を代表する貴重な建築であるため、2005（平成 17）年に「国土の歴史的景観に寄与する」として登録有形文化財建造物に登録されました。終戦以前に建設されて現存する地方庁舎建築の多くは県庁や県庁所在地の庁舎で、これら以外の庁舎で当市庁舎本館のように大規模で塔屋を高く設けた現役の庁舎は他に類を見ないと言えます。設計は福岡県営繕課が担当し、当時の地方の建築技術者の高い設計力を示す建築でもあります。また、議場や貴賓室のマントルピースに見られる特徴的な装飾は当市庁舎本館の見所になっています。屋上に残る高射機関銃台座や防空監視哨は大牟田市における戦争の一側面を伝えています。

このように 1936（昭和 11）年の竣工から今日までの大牟田の数々の歴史とともに歩んできた当市庁舎本館は様々な価値を有した貴重な建築です。

貴下におかれましては、この貴重な建築の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、当市庁舎本館が後世に継承されますよう格別の御配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会九州支部としましては、この建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

一般社団法人 日本建築学会
九州支部建築歴史・意匠委員会 委員長 伊東龍一

登録有形文化財大牟田市庁舎本館についての見解

福岡県大牟田市の中心部、大牟田駅の正面に建つ大牟田市庁舎本館(福岡県大牟田市有明町2丁目3番地)は平成17年12月26日に「大牟田市役所本庁舎旧館」として登録有形文化財に登録された。昭和11年に建設され、昭和20年の空襲にも耐えて、今なお現役の庁舎として使用されている。建築面積は1378㎡である。

登録時、以下のように文化庁は解説する。

「JR大牟田駅前に位置する。正面を62mとしたRC造4階建の庁舎建築で、中央背面に議場を張り出す。縦長窓を密に配した採光に配慮したつくりで、複数の蛇腹と中央部の柱形で外観を引きしめる。正面中央部には5層の塔屋を設け、中心性を強調する。」

1 建設の経緯

昭和8年5月、前身建物が火災で焼失した。同年7月31日、第1回市庁舎建築委員会が開催され、計51回の審議が行われた。昭和11年5月1日の落成式での報告には、「廣ク先進都市廳舎ノ特長ヲ取り豫テ委嘱セシ本縣營繕課ノ劃面圖案及建築専門技師ノ計劃案ヲ基礎トシテ研究ヲ遂グ以テ其長ヲ採り短ヲ補ヒ設計圖案完ク成リ(中略)實施設計ヲ本縣營繕課ニ依托シ(後略)」とある。

昭和8年の「市廳舎視察報告書」は、大阪府庁舎・京都市庁舎・名古屋市庁舎の調査報告書である。大阪府庁舎は大正15年、京都市庁舎は昭和2年、名古屋市庁舎は昭和8年に竣工している。ちなみに、昭和10年の人口は、大牟田市の104,992人に対し、大阪府が4,297,174人、名古屋市が1,082,816人、京都市が1,080,593人である。大規模自治体の庁舎を調査していることがわかる。

工事は、基礎工事が東洋コンプレッソル株式会社により昭和9年10月12日から翌10年1月28日まで行われ、本館の施工工事が柿原組により昭和10年1月19日に起工、翌11年3月15日に竣工した。総経費は402,680円であった。なお、昭和11年5月「市廳舎新築記念繪葉書」に納められた「大牟田市廳舎新築工事概要」には竣工を4月30日とする。

設計は、上述のとおり福岡県営繕課で、当時の課長は薄與莊(すすきよそう)であった。なお、上述した報告には、「本縣營繕課ノ劃面圖案」と「建築専門技師ノ計劃案」とある。建築専門の技師については詳らかでないが、「石本喜久治略年譜」の主な作品として1935~1939年に竣工したものの中に福岡警察署・八幡警察署等と並んで「大牟田市庁舎」を記載する。そこで、石本建築事務所が基本設計、福岡県営繕課が実施設計を行っただろうと推測されるが、詳細は不明である。

昭和40年代に外壁のタイルが剥落防止のために取り外され、モルタル仕上げに変更されているが、竣工当時の状況をよく残している。

2 建築概要

西を正面として建つ本館は、鉄筋コンクリート造4階建で、その上に展望室が最上階にある5層の塔屋を設ける。当時の記録では建物高さは112尺6寸と記す。国道に面する正面の幅は62mと長く、その両端部を曲線で納める。正面中央部をわずかに突出させ、2階に玄関を設けて、さらに塔屋を建てて中心性を示し、左右対称形に納める。その一方で、柱間に規則正しく配された2連の窓の頂部にある水平帯等により、水平性が強く表現され、大きな壁面の単調さを崩している。

平面は北側と中央部が背面側に突出しているが、北側の突出は1・2階のみであるため、平面形は1・2階がF字形で、3・4階は北側の突出がないため平面形はT字形となる。なお、現在は増築のため1階から4階までF字形に構成されている。

現在の外壁の仕上げはモルタルであるが、当初の仕上げは、1階部分は人造石、2階以上はスクラッチタイル貼であり、仕上げの異なる基壇部分の上に上階を載せた庁舎建築の多くで採用された造りをみせる。

屋上には高射機関銃台座や防空監視哨が残っており、昭和19年と20年の空襲で、大牟田市内は焼け野原

になったものの、本館は空襲にも耐えた建築である。

議場内部の天井の装飾や梁下端の装飾、4階中央部に設けられた貴賓室のマントルピースの装飾に特徴的なサラセン・モチーフを見ることが出来る。

3 大牟田市役所本館の価値

(1) 昭和戦前期の地方庁舎建築としての価値

昭和戦前期の鉄筋コンクリート造（鉄骨鉄筋コンクリート造を含む）の地方庁舎建築として、重要文化財指定は名古屋市（昭和8年）と愛知県（昭和13年）の2棟、登録有形文化財は大牟田市を含め、神奈川県（昭和3年）や滋賀県（昭和14年）等13棟である。文化財に指定・登録されていない庁舎として大阪府・京都市、旧戸畑市等がある。

これら残存する庁舎の中で県庁や県庁所在地以外の庁舎はわずかである。それらは、大牟田市以外に門司区（旧門司市）・津山市・岡谷市・旧戸畑市等が該当する。現役の庁舎として使用されているのは大牟田市と門司区である。

神奈川県庁本庁舎のような塔屋を高く設け、4階建てで大規模な市庁舎として大牟田市庁舎本館は貴重である。また、F字形の平面も特徴的であり、昭和8年に視察した大阪府・京都市・名古屋市の平面形と異なっていることは、「研究」の成果が反映されていると推察される。

当市庁舎本館は昭和戦前期に福岡県営繕課が設計したことが確認される建築である。当建物以前の昭和8年には鉄筋コンクリート造3階建て、4層の塔屋をもつ旧戸畑市庁舎（建築面積1076.76㎡）を手掛けている。当建物は旧戸畑市庁舎よりも規模が大きく、立面構成においても洗練が見られ、営繕課の設計力の高さを示す貴重な建築でもある。

(2) 三池炭鉱の石炭産業による大牟田の繁栄を示す建築としての価値

大牟田市内には世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産である三池炭鉱宮原坑・三池港がある。明治期の旧三池炭鉱宮浦坑煙突（明治21年）、旧三池炭鉱三川電鉄変電所（明治42年頃）は登録有形文化財に登録されている。また、旧長崎税関三池税関支署（明治41年）は福岡県指定文化財に、港俱樂部（明治41年）は大牟田市指定文化財に指定されている。このように明治期の関連施設は保存の対象になっているものが多い。ところが、明治よりも新しい関連施設は多くはない。そのような状況の中で、大牟田市役所は三池炭鉱に直接的に関連する施設ではないものの、三池炭鉱の存在により繁栄した大牟田だからこそ建設することができた建築であり、明治からの継続的な大牟田市の繁栄を示す貴重な建築である。なお、総経費約40万円の内、三井グループが10万円を寄付したという。

昭和8年の大阪府・京都市・名古屋市の視察から分かるように大牟田よりも大都市の庁舎を参考にしたことも当時の大牟田の勢いを示している。5層の塔屋は、最頂部の展望室から約4km南西に位置する三池港に入港する船舶を見る、或いは入港する船舶から見えることを意図したと推測することも可能であろう。

竣工前年の昭和10年の大牟田市は、その人口が10万人を超えて全国33位の規模を有した地方有数の都市であった。当市庁舎本館は三池炭鉱の石炭産業とともに繁栄したことを示す貴重な建築である。

(3) 大牟田の象徴的存在としての価値

当市庁舎本館は大牟田駅前に建ち、高い塔屋を備えたその特徴的な姿から人々は強い印象を受ける。戦火をくぐりぬけ、昭和11年から今日まで、数々の歴史を見守り続けた当市庁舎本館は、80年以上もの長い間存在し続けていることで、絶対的な存在として価値を有しており、その存在は人々に安心感を与え、さらに人々に様々な記憶を思い起こさせる機会も与える。このように当市庁舎本館は、大牟田市にとってのシンボルであり、また、市民にとってのリビングヘリテージとして重要である。

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産である三池炭鉱・三池港が存在する大牟田市にとって、まちづくりや観光の面で近代化遺産は非常に重要な資源に成り得る。今後それらの面で大牟田市の中心地にある当市庁舎本館が果たす役割の可能性は計り知れない。

2025年には昭和100年をむかえる。その際には昭和について何らかの論議が行われるだろう。昭和を代表する名建築としてその時に当市庁舎本館が存在することの意義は非常に大きい。

参考文献

- 1) 『大牟田市史（全）』昭和19年 複刻版昭和49年11月 名著出版
- 2) 石田潤一郎『都道府県庁舎その建築史的考察』 思文閣出版 1993年2月
- 3) 片野博「地方自治体(福岡県)の建築関係組織の実態 明治・大正・昭和 建築活動の地方性に関する研究」
日本建築学会計画系論文集第487号 pp.177～186 1996年9月
- 4) 藤原恵洋「大牟田市役所本庁舎旧館 建築の評価に関する所見および今後の保存へ向けての意見」 2019年2月
- 5) 白川直行「近代日本, 建築家の足跡〔9〕石本喜久治」建築文化NO.528 1990年10月
- 6) 「昭和十一年五月 市廳舎新築記念繪葉書 大牟田市」
<http://yamada.world.coocan.jp/cityhallehagakil.html> 他



全景



正面



議場



議場梁下端裝飾



議場柱上部裝飾



貴賓室マントルピース



貴賓室マントルピース細部



貴賓室マントルピース上部装飾



屋上 高射機関銃の台座



屋上 防空監視哨

(撮影：針金洋介氏)